

# 外 観 と 内 観

職業訓練大学校 成 瀬 政 男\*

## 1 海 の な が め

まず例からいしましょう。海岸にいて海をみます。これは海を「外観」することです。われわれの眼には、むろんのこと、海面がみえます。そこには波がたっています。近いところには岸があり、岸の手前には松が、はえています。遠いところには水平線があり、そのあたりには、船が走っています。岸辺の岩にはカニが横ばいしていますし、波打ちわの砂のなかには貝もいます。そこには、海岸特有の景色がみられます。

もっとよく見ます。風のある日には波が多くたちますし、風がないときには平穏です。空気が海岸をとりかこんでいるからです。そこにみえる松もこの空気の移動一風一によって、海岸に、はうように生えています。一空気を通して海をみるということ、これが海にたいする「外観」というものであります。

では今度は、眼がねをかけて海にはいり、体を海中に沈め、外から見たいまの海を、内部からながめてみましょう。空気を通して海を見るかわりに、今度は、海水を通し、海水のなかから海を見るのであります。すると、いままでとはちがった景色が目に入ってきます。はじめのうちは、そうでもありませんが、なれてきて、心が落ちついてきますと、いままでには見られなかった景色が、海の中からだんだんと見えてきます。

まず、海の中の岩には海藻が美しくはえているのがみえます。そのあいだを魚が泳いでいます。単独に、また群をなして泳いでいます。海藻の根元をよくみます。岩でできた棚もあり、また孔もあります。棚や孔にはサザエやアワビがいます。ときには、エビもいることもあります。一匹いることもあります。多くは群れを作っています。孔から角だけをだし、それがちょうど、秋の彼岸花のような美しい群を作りながら、海水のゆれ動くとともに、ゆらいでいます。

海のなかでは、海水にはぐくまれて、いろいろの生物がその生命を伸ばしています。それらのものは、私たちの生活に幸福を与えてくれます。しかし、なかには私たちに危害を与えるものもあります。さわれば指をかみとる魚もいます。またわれわれの生命をそこなうような毒

をもった魚も泳いでます。このような様子を見ることを私は海を「内観」として名づけました。

「内観」してわかることは、つぎのことです。それは海の生物はその周囲にある海水というものからエネルギーをうけて、そのエネルギーに育てられているということです。そのことは、われわれの生活に役立ってくれる。しかし、いつも役立つものばかりとは、かぎらない。生活を害うものもある、ということです。

このことを「外観」に応用してみましよう。「外観」でみる海岸の生物、松も草も芝生も、これらはみんな、それをとりまく空気というものからエネルギーをうけて育っていくものであります。

内観は主に海水という場所、その場所に、はぐくまれたものであります。また、外観は主に、空気のある場所—そのような場所にはぐくまれて、できあがったものであります。

外観と内観とで、同じ海であったとしても、違った景色が、わたくしたちの目に映ってきます。その原因の主なものは、一方は、それをとりまくものが空気であり、他方は海水であるということであります。

もっとよく見ますと、海を外観することによってみられる生物は、それをとりまく空気にはぐくまれて育てられたものであり、海の内観でみられる生物は、それをとりまく海水に育てられて成長しているものであるということがわかります。

物をとりまく周囲のものを、わたくしはこれから場所の「場」という言葉で表わすことにします。

よって外観の海は、その「場」が空気になります。内観の海は、その「場」が、海水になります。外観でみられる生物は、空気という「場」にはぐくまれ、内観でみられる生物は、海水という「場」にはぐくまれたものであります。外観することと内観すること、物の価値というものは、ちがってくるということがわかります。それですから、同じ物でも、一つの見方、外観だけでみるのでは、真の姿はわかりません。見方をかえてみる、「場」をかえてみる、このことが大切であります。

そこで皆さん、これをわれわれの工業に応用してみましよう。私たちは、いまこの工業という場で、工業に必要なものを学んでいます。これは一つの「場」でみてい

\* 東京都小平市小川西町 職業訓練大学校長

るのであります。私は皆さんのごらんになるこの工業を、これは外観しているのだと考えます。そこで、この工業をひとつ、内観してみたいのであります。海水用のめがねをかけて、工業という海の内側にもぐっていき、工業を内部からながめてみたいのであります。そうすると、いままでとはちがった景色がみえてきそうです。事実その内側からみた景色の美しいこと、すばらしいこと、そしてまた、おそろしいこと、それらは海の中を内観するどころのものではありません。

## 2 物の生産を外観的にみる

工業では、物を生産するということが本務です。そこで私は、物を生産する人々は、昔、はたして幸福だったのでしょか。これから、これを考えてみたいのです。

例として「蚕婦」という題の漢詩をとります。これは作者が無名氏とありますから、だれが作ったのかはわかりません。その題の下には「城をでて家に帰る。感あり涙下る。蚕をせざる者をみるに皆羅綺を衣す。蚕を養うことの辛苦を知らず。」と書いてあります。そしてそのつぎに以下の詩がのっています。

昨日城郭にいたり 帰り来って涙巾にみつ

遍身綺羅のものは これ蚕を養う人にあらず

それはきっと若い娘なのでしょう。田舎にいて蚕をかい、絹の布をおって、これを町にうりにきた娘が、涙ながらいうのです。私は寝る眼も寝ずに蚕をつくり、絹物を織り、これを城内にうりにきた。そしていま城内の人々の様子を見て涙が手ぬぐい一杯になった。ほんとうに、おかいこぐるみになって暮している城内の娘たちは、おかいこの世話をし、糸をつむぎ、布を織る私たちではありませんでした。このことを思うと、私は涙がでて、手ぬぐい一杯になりました。

働かないでいる人、物を作らないでいる人、この人々は城のうちで幸福そうに暮しています。働いている人、絹を織る人。この私は城の外の田舎で労苦にあえいでいます。それを思うと涙が巾一杯になると、この詩ではうたっています。

物を作ることをみる。そして物を作る人々をみる。たしかにそれは、この詩にありますように、涙が巾にあふれるように思われます。幸福からは遠いところにあるように思われます。私は、このように物を作る人は涙が巾に満つるようであったといっても、それはその通りであったと思います。たしかにそうだと思います。

ですけれども、私は思います。このことはさきの「外観」という見かたから、ながめたものだと思うのです。空気の中で海岸をみるのと同じことだと思うのです。一

つの「場」というものから物を作る人を見、いわゆる「外観」というものにあたるものだと思います。「場」をかえて、物を作るこのことをみつめましょう。つまり「内観」してみることにしようではありませんか。

## 3 物の生産を内観的にみる

ここで私は、新しい別の「場」を考えてみます。そのために私たちは、歴史的に、私達の幸福というもの、どのように、のびてきたか、ということ、ふりかかって見ることにしましょう。

大昔、私達の祖先は、どのようにして、この大地に住みつき、今日にいたったのでしょうか。

その一例として、わたくしはいま、静岡の郊外にある登呂の遺跡をさぐったときのことを思い出します。登呂の遺跡——日本の大昔、それはわれわれの国の建国の始ゆのころから、あまり遠くはないころのことだったでしょう。日本民族は、たしかにこの登呂に住んでいました。この登呂が洪水にあって、とつじょとして土砂のなかに、そのまま、うずもれてしまいました。近年掘りだされるまでに、長い年月を、原形のまま、土中にたもたれていました。

私は再現された当時の住宅をみました。それは地面から1メートルほど掘り下げた土間の上を、わらぶきの屋根がおおっていました。土間には円形の、いろいろあります。当時の私たちの祖先は、このような住み家に住んでいました。私は思いました。そのころの人々は、猛獣や、おおかみの遠ぼえには、きっとこの中で、おびえていたことであろう。そのような夜には、このいろりで、火をたいたことであろう。そして、たいた火のほのおで、猛獣やおおかみの害を防いでいたことであろう。しかし、ここにもきっと大蛇はきたことであろう。音もなくきたことであろう。年毎に季節をきめてきたことであろう。ちょうど、青だいしょうが鶏の卵をとり、家の中に、音もなく入ってくるように、ここにも、きたことであろう。こんなように思いました。

毎年のように娘が大蛇にうばわれる。今宵は最後の娘がうばわれる日だ。老夫婦はこの娘をなかにして、涙にくているというところが、われわれ民族の古い物語にできます。もっともな、ことだと思われれます。

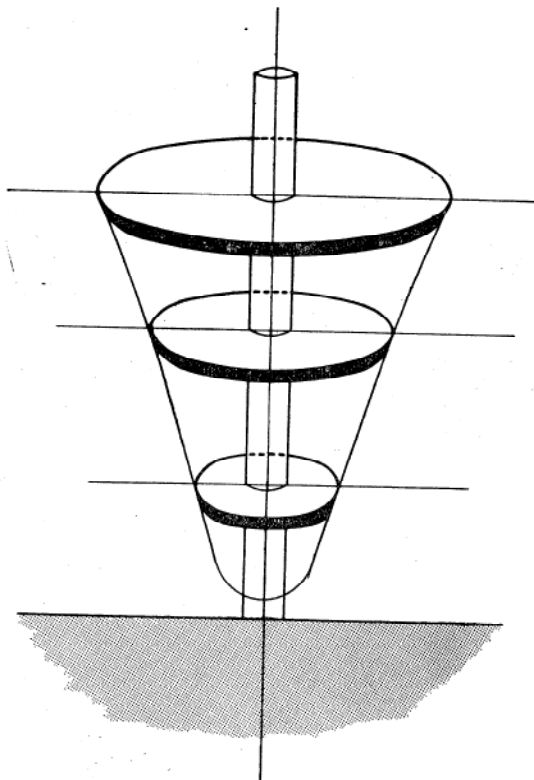
そのころの幸福は、それは決して大きいものではありませんでした。小さいものでした。私は太古の小さいこの幸福を、小さい円板をとり、これで表わすことにしました。

しかし、時がたって中世になります。そのころのわれわれの幸福は、太古の幸福よりも大きくなってきました。われわれはもう猛獣にも大蛇にも害されることはなくな

りました。しかしそれでも冷害や、飢きんはわれわれに  
つきまとい、ときにわれわれの命をおとすことも、めず  
らしいことではありませんでした。また、ばい菌や病気  
には、わたくしたちは、まことに弱かった。幸福は太古  
よりも大きくはなってきましたが、それはやや大きくな  
ってきたというに過ぎません。それで私は、中世のこの  
幸福を、中ぐらいの大きさの円板で示すことにしました。

近代になりました。もう細菌に苦しめられることはな  
くなりません。冷たさはあるものの、その害に苦しめら  
れることも、すくなくなりました。遠くの所へでも楽に  
いけるようになってきました。速くの音も楽にきくこと  
ができ、速くのものも楽にみることができようになりま  
した。近ごろの幸福さは、まことに大きいものになって  
きました。私はこれを大きい円板で表わすことにしまし  
た。

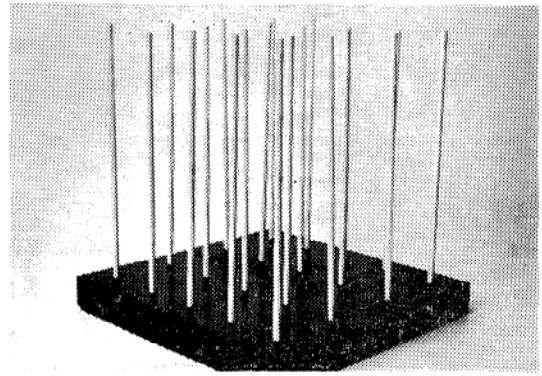
そうすると、歴史の軸を下から上にとり、さきにえた  
3つの円板を次々にこの軸の上においてみることにしま  
す。するとここに太古から中世をへて近代にいたるまで  
の人類の幸福を示す立体形ができます。これを幸福体（  
第1図）と名づけました。



第1図 幸福体

#### 4 幸福体に対して「場」を考える

海を外側という「場」からみたのが外観でした。そこ  
には空気という物があり、そこにあるものはすべて空気  
にはぐくまれている「場」であることがわかりました。こ

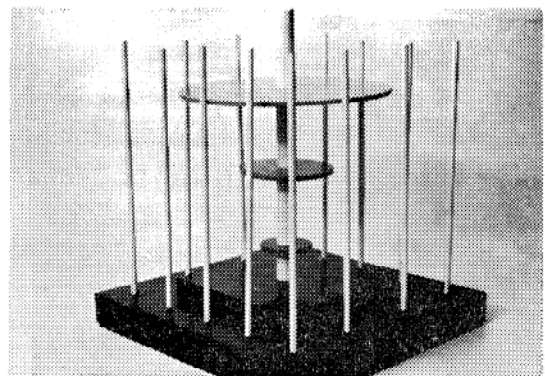


第2図 棒で表わしたKの場

の海を見かたをかえて内からみます。それが内観でした。  
これは海を内側という「場」からみたことです。そこ  
では諸々のものが、それ相応に育っています。これは海  
の中という「場」があるがためです。前へのべたとおり  
です。さて、いまここに幸福体というものが存在してい  
ます。幸福体の存在しているということは、それはたし  
なことです。では、この存在を可能ならしめている、そ  
のおくには、必ずこの存在を可能ならしめる「場」と  
いうものがあるはずで、その「場」があるがために、こ  
こに、このように幸福体ができているのです。私はこの  
「場」を「Kの場」と名づけました。そして、それを第  
2図にしめすように、多くの棒で作った群で表わしまし  
た。棒の群のかわりに光をもってかえ、これで幸福体  
にたいする「場」を表わしてもいいと思います。

#### 5 幸福のモデル

これまでののべたところのものを総合すると、幸福に  
対するモデルができます。このモデルはさきの幸福体が、  
Kの場の中におかれた形のもので表わされます。つまり  
これは第3図のような形のもになります。ここでKの場、  
すなわち幸福の場は、図示の棒の群で表わされ、人々  
幸福は、この棒の群の中におかれた幸福体によって表わ



第3図 幸福の場においた幸福体

されます。この幸福体の下部が、小さい円板で表わされていることは、歴史のはじめのころは、人々の幸福は小さかったことをしめし、中ごろの円板がやや大きいのは、中世の幸福がやや大きくなったことを示し、上部が大きい円板で表わされていることは、近代の人々の幸福が大きく育ってきたことを示すものであります。

## 6 真の幸福

われわれが、Kの場に一致同調するようにすると、われわれは自覚して、Kの場に住むことになる。するとわれわれはKの場により自由に出入することができるようになる。したがってわれわれはKの場にあるエネルギーを、われわれの体に、より多くうけいれて、幸福になるように行動することができる。そのときに、われわれは真の幸福感を味わうことができるのであります。

孔子のいう仁は、Kの場の内容をさすことであると思えます。釈迦のいう慈悲もKの場の内容のことであるしキリストのいう愛も同じものであると思えます。

それですから、孔子を例にとりますと、われわれが仁と一致同調することが幸福である。仁に一致同調しないものは、われわれの不幸であるということになります。

例えていいますと、論語につきのようにのべられています。

「子曰く、疏食を飯ひ、水を飲み、肱を曲げてこれを枕とす。楽もまたその中にあり。不義にして富みかつ貴きは、われに於て浮雲の如し」

ここで孔子のいいたいとするところは、つきであると思われま。

「私は幸福なるものを内観している。そしていま仁をおこなっている。仁こそKの場、そこに存在しているものである。仁は永遠にわたっての幸福の源泉である。仁に一致同調し、行動をする。このことが私の最大の幸福である。よし水を飲み、肱を枕にする貧しさにあつたとしても、それは外観のことである。内観してみようではないか。内観する。そこに仁がある。この仁に一致する。これが最大の幸福である。私はいまこの仁に一致している。だから幸福の場に一致している。私の楽はここに存在する。不義、これはKの場に反対のものである。だから不義で富み、不義で貴くても、それはKの場からみると、すぐに消える、はかないものである。まるで浮き雲のように、はかないたよりない不安なものである。」

孔子のいうことは、私にはよくわかります。孔子は物事を外観するとともに、特に、内観しています。内観して、幸福というものは仁というものであることを発見しています。ですから仁におのれを一致させる、そこに幸

福をみつめていると思えます。

皆さん、われわれも、われわれの作ったモデルを通して幸福というものを考えてみようではありませんか。そのときに幸福を外観するばかりではなく、内観してみようではありませんか。内観してみると、外観してみたときとは違った景色が現われてきます。そこには、このモデルにあるKの場がみえてくるようになる。人はこのKの場に一致同調するときに最大の幸福にひたることができるにいたることを発見するようになるのであります。

## 7 物を生産することのモデル

ほかのものには関係なく、物を生産することだけを取り、これについて考えて、そのモデルを作ってみましょう。住居を例にとりましょう。大昔は、人はおそらく樹木の上に、そのすまいを作っていたのでしょ。そのすまいは、きつと鳥の巣に、にたものであったと思われま。やや過ぎると人は、木の上から大地におりました。大地の、たとえば、がけの横にほら穴をほり、そこに住みつきました。それは、ちょうどモグラかネズミと同じ様子であったことでしょう。

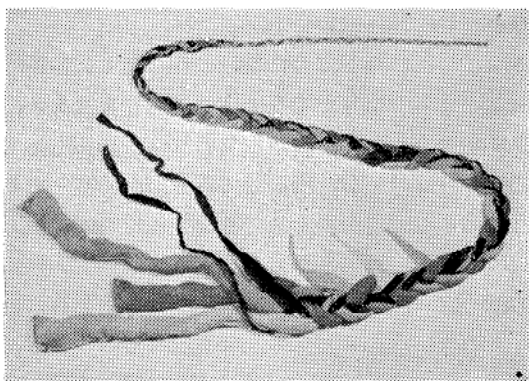
人が鳥やモグラやネズミと違うところは、どこであったでしょうか。このような動物は昔も今も、ほとんど同じことをして住んでいます。つまり本能によって住んでいます。しかし人は本能ばかりではしていません。本能がすこしで、あとは心で考え、心の知恵をしぼり、次第次第に住居に改良を加え、いつも新しい、よりよいものを作って住み、その生活を進歩させてきました。つまり心を働かせながら物を作って生存してきたこと、このことが人類の特徴であります。住居にかぎらず、他の生活に必要な物についても、同じことがいえます。

一般に心を働かせる、物の道理をきわめて、その道理を整理したもの、これを科学といいます。科学の応用で物を作る準備をする。つまり設計や製図をする。これを技術といいます。科学や技術をわきまえながら、これを裏打ちとして物を実際に生産していくこと、これを技能といいます。

逆にいいます。物を生産する主役が技能です。この技能の準備行動だとか、できたあとの批判をすることだとか、これらのものを技術といいます。全体の物の道理を科学といいます。

科学と技術と技能とは、物を生産することに進歩を与えてきました。3つのどれを欠いても物の生産はできません。よしできたとしても、それは鳥類かモグラかネズミの作る業にとどまってしまうだけののであります。

それですから私は科学、技術、技能の3つのものをス



第4図 科学、技術、技能の縄すなわち生産の縄

トランド（縄の素——小縄）にして、これらのものでより合わせて一本の縄をつくり、この縄で人類の物を生産する業をモデル化しました。これを科学、技術、技能の縄、または生産の縄と名づけました。第4図のとおりです。

## 8 生産の縄の成長

科学、技術、技能の縄、すなわち生産の縄は、時代とともに成長してきました。人に考える心があるからです。鳥や獣と同じ住み家にいた人類は、紀元前5000年にして、すでに立派な宮殿を作るまでに成長してきました。そこでいい生活もしていました。生のあるあいばかりではありません。王者などになりますと、その死後も立派な住居の中に、自分の再び帰ってくる時の、なきがらを保存しておくことさえも出来るまでになりました。いまでもエジプトのギゼイにそびえるピラミッドは、その代表的のものであります。

中世になりますと、科学、技術、技能の成果は、だんだんに発展してきます。したがって、物を生産する業も大きく育ってきました。このような様子を、私は、相当の太さを、前述の生産の縄の径に与え、これで中世の物を作る業をシンボライズしました。この縄の径の一端を次第に細くしていきました。一番細くなったところを太古における物をつくる業を表わすものにしました。

近代にいたっては物を作る業はどうなのでしょう。それはもうわれわれのよく知っているところであり、空中には高速度をもつ航空機が飛び、その上空の空気のないところには人工衛星がまわっています。下界には新幹線の列車が走り、わが国の自動車も外国にまでもでいきます。船は一隻が20数万トンのものまでもでき、わが国で全額74億円以上の造船を本年度において実行します。それは昨年より40%以上の増になっています。このように日本をめぐるところだけでも、たくさんの物が生産されています。このために生産の縄は、いちぢるしく

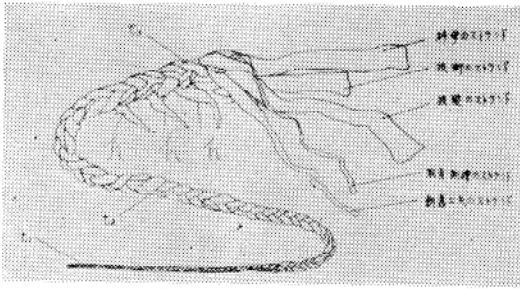
太くなってきました。よってさきの生産の縄の他の端を太くして、これによって近代の物を生産することの盛大さを表わすことにします。

太古から中世をへて、近代にいたるにしたがって物を作る業は、次第に大きくなってきたことは、さきにいったように、人々の考える力と腕の力によることです。つまり科学と技術と技能の総合力によることですが、もっとこれを細かく考えてみましょう。そして物の生産の量を大きくすることは巨が原因であるか、また質を増すことは何が原因であるか、これら量と質との二つのものを増大するものは何が原因であるかを考えましょう。すると量を大きくすることは教育・訓練がその中心をなすものです。また質をよくすることは、創意工夫がその中心をなすものです。むろん教育・訓練にも、創意工夫にもそれぞれ、そのなかに科学・技術・技能があります。しかし、それらをはっきりと分離して考えることは、むづかしい。それで私はやはり、あざなう縄の形式をとりました。つまり教育訓練という縄の素をとり、また創意工夫という縄の素をとります。これら二つの縄の素を、さきにえた科学、技術、技能という三つの縄の素に加えて、合計五つの縄の素をとる。そしてこれらの縄の素を、より合わせて、一本の縄を作るのです。作られたこのものが、歴史の時とともに成長していく、物を生産する業を表わすシンボル、つまり生産の縄となるのであります。

## 9 生産の無関心性

科学、技術、技能に、教育訓練と創意工夫とが加わると、物の生産というものは盛んになってきます。生産された物は、またつぎの新しい物を生産して行って、つぎつぎに、とまるどころが知れないほどになります。それで物を生産することは、あたかも、物それ自身に生命があるかのように、どんどんと、つぎからつぎへと成長していきます。それはちょうど、外のことは考えないで、自分自身の道だけを、まっしぐらに歩いていくかのような姿になります。そして人間の幸福に役立つなどということには、まったく関心がないかのような姿になります。この姿を私は、生産の無関心性と名づけました。

人によって作られた物に、このような人の幸福に無関心な性質が伏在しています。私はこの状態を、どう処理して進もうかと思いました。私はまず自分自身が、内観するのです。内観して、私がKの場にいるということを見とめるのです。私がこのKの場に一致同調し、ここに存在しているときに、無関心な物は転じて、人の幸福に参与するようになるものと考えたのです。つまりそのような心構えによって、私は装置を工夫するのです。そう



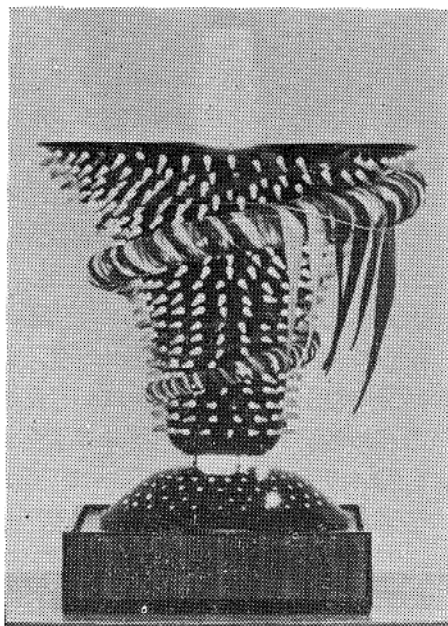
第5図 人に幸福を与えない物を示すモデル  
(図のhで示す)

すれば、その装置によって、無関心に存在している物からも、ある $\delta$ %だけは、人の幸福に参与する物を、ぬきだせられると考えるのであります。ぬきだされたあとに残ったものは、時間をかけて、さらに研究を重ね、ついにそれを全部、無関心でないものにまでさせる。このようにしたいのであります。

このようにしていきますと、作られた無関心なる生産中の $\delta$ %は、たしかに、人間の幸福に役立つものになります。残りのもの、つまり $(1-\delta)$ %は、いままでは、人の幸福に役立つものにはならないのです。この、すぐに人の幸福に役立つ物でない物の部分を、魚のヒレのような形でシンボライズし、これをさきの生産の縄につけ加えます。第5図のhで示すものがこれです。

### 10 幸福体と生産の縄との関係

これまで、幸福体を取りあげて、これを独立に考えてきました。科学、技術、技能と、教育訓練、創意工夫の効果、すなわち生産の縄もまた独立に考えてきました。両者のあいだには、なんの関係もなく考えてきました。



第6図 幸福体と物の生産の関係を示すモデル

この両者にこれから関係をもたせたいのです。それにはどうするか。それは両方ともに時の関数になっています。それですから、時を同一にして両者を接触をさせます。すなわち太古の時( $t_1$ )のときの幸福体の部分の外側に、同じときの生産の縄をつけ加えます。中世の時( $t_2$ )と近代の時( $t_3$ )のときも同様にします。するとその様子は第6図に示すものになります。これで人々の幸福と、物の生産との相互関係がモデル化されます。

### 11 生産する能力 $y_a$ の表示

$\alpha$  を努力係数、 $n$  を環境係数、 $t_0$  を技能訓練開始年令、 $t$  を訓練の時間、 $\beta$  を転位係数、 $y_0$  を  $t$  が  $t_0$  のときの  $y_a$  の値、 $R_t$  を老衰値、 $k$  を職種によって変る定数とすれば、物を生産する能力  $y_a$  は次式<sup>1)</sup>で表わされます。

$$y_a = \frac{\alpha k}{n-1} \left( \frac{1}{t_0^{n-1}} - \frac{1}{t^{n-1}} \right) + \alpha \beta y_0 - R_t \equiv y_1$$

われわれの幸福に資す  $y_a$  は  $\delta y_a$  であります。この  $\delta$  を幸福係数と名づけます。

$$\delta y_a = \delta \left[ \frac{\alpha k}{n-1} \left( \frac{1}{t_0^{n-1}} - \frac{1}{t^{n-1}} \right) + \alpha \beta y_0 - R_t \right] \equiv y_2$$

もう一つ、幸福体のなかで育つ  $y_a$  があります。これを  $y_3$  とします。  $y_a$  のなかで、もしも人の幸福を害するような芽ばえが、すこしでも、できそうときには、すぐにその芽ばえをつみとってしまって、育てていく物  $y_a$  は、いつもみな人の幸福に資すものばかりのようにします。こうなったものを  $y_3$  とします。そのときの符号を頭文字で表わすと次記となります。

$$y_3 = \frac{\alpha K}{N-1} \left\{ \frac{1}{T_0^{N-1}} - \frac{1}{T^{N-1}} \right\} + \alpha \beta Y_0 - R_T$$

以上は個人のもつ生産の能力ですが、団体のもつ能力ももとめられます。各個人の能力を加え合せたものを  $\Sigma$  でしめしますと次式となります。

$$\Sigma y_1 = \Sigma \left[ \frac{\alpha k}{n-1} \left\{ \frac{1}{t_0^{n-1}} - \frac{1}{t^{n-1}} \right\} + \alpha \beta y_0 - R_t \right] \pm T$$

$$\Sigma y_2 = \Sigma \delta \left[ \frac{\alpha k}{n-1} \left\{ \frac{1}{t_0^{n-1}} - \frac{1}{t^{n-1}} \right\} + \alpha \beta y_0 - R_t \right] \pm \delta T$$

$$\Sigma y_3 = \Sigma \left[ \frac{\alpha K}{N-1} \left\{ \frac{1}{T_0^{N-1}} - \frac{1}{T^{N-1}} \right\} + \beta y_0 - R_T \right] \pm T$$

ここに  $T$  というのは団体を作ったところからでてくる生産の値であります。このものが物を生産する能力の総和に影響してくることは、もちろんのことです。

1) 成瀬政男, 技能訓練の過程について, 機械学会誌 第70巻 第585号, 昭和42年10月

## 12 人の幸福に役立つ生産ないし技術

人の幸福に役立つ生産ないし技能は、幸福の場、Kの場で実現されます。技能によってえられた生産の業である  $ya$  をとって考えます。このものは、たしかに人に幸福を与えてきました。しかし近代になってきますと、あまりにも生産が偉大になってきましたので、まへのべたように、生産の業の  $ya$  は、いつも人の幸福だけに参与しないようになってきました。ちょうど、自らの意志があるかのように、それらのものは、まっしぐらに生産という己が道を進んでいきます。そして人の幸福などにかまっていられない、人が幸福にならうと不幸にならうと私は、それには責任はないとかのように、己が道をまっしぐらに走っていきます。このことは前述のとおりであります。これが原子時代をむかえつつある今世紀の大問題であります。なんとかしなければならぬことでもあります。

そこでわたしたちは、生産の業ないし技能について思いをめぐらす必要にせまられてきます。これらを外観するとともに内観してみなくてはなりません。

生産のわざ、ないし技能について内観を重ねてみましょう。そこにはKの場という幸福をもたらす場の存在していることが発見されます。そして生産のわざ、ないし技能というものは、その全体が、われわれに幸福だけをもたらしてくれるものではないということも発見されてきます。幸福をもたらしてくれるものは、全体のものの  $\delta$  %である。残りは幸福をもたらしてくれるものでないということがわかってきます。よって生産の値  $ya$  のうちで、われわれの幸福体の中に入ってくるものは  $\delta ya$  だけであるということがいえるのであります。

## 13 幸福体の表皮のろか性

われわれの幸福に役立つ生産ないし技能は、さきにもとめた値  $ya$  の  $\delta$  %であることが、いままでのことでわかりました。つまり  $\delta$  というものは、生産された物  $ya$  から、われわれを幸福にするものと、しないものとを、えりわけるときの率であるといえられます。あるいはまた、生産されたもの  $ya$  を、われわれの幸福に役立たせるとき、これにフィルターをかけます。そのフィルターを通して、ろかされてきたときの率が  $\delta$  だといってもいいと思います。

生産ないし技能の値  $ya$  をろかして、それを幸福体に入れるには、関門をもうけて、その関門をくぐらせるようにします。その関門を入れるものと入れないものとをえりわけるときの力は、Kの場から生じてくるものであります。

なんとかして人を幸福にしたいと思って関門を設けているのです。そこへ  $ya$  がきたときには、これについて  $ya$  のうちの、いいものだけを入れるように、いつも見張りをしているのです。

見張っているときの関門は人に幸福を与えるという垣根でかこまれています。この垣根が、さきに示した第3図の棒の群です。この棒の群でかこまれた力は、幸福体の表皮にまでおよんでいます。そして幸福体の表皮は、人に幸福を与えるものは通過させ、そうでないものは通過させないという力をもっています。つまり幸福に対して幸福体の表皮はろか性をもっています。

表皮のろか性によって、 $ya$  のうちで人に幸福を与えるものだけが、幸福体にはいっていきます。はいつていつた  $ya$  による物は、Kの場と一致同調することができ、かくして人々に幸福を与えることができるのであります。

これらのことを心にとめて、わたくしは昔の聖人賢者の言葉をきいてみたいと思います。

## 14 聖賢の言葉 1

さきに中国の聖人の孔子の言葉を紹介しました。今度はインドの聖人釈迦の言葉を紹介しましょう。釈迦につきのような言葉<sup>2)</sup>があります。

「たといわれ仏をえんに、国中の<sup>いいてい</sup>人天、衣服<sup>きふく</sup>をえんと欲せば、念にしたがって即ちいたり、仏の<sup>しよきん</sup>所讚の如き、<sup>おほほうしよふく</sup>応法妙服 自然に身にあらん。もし裁縫<sup>さいほう</sup>染濯<sup>せんじやく</sup>することあらば、<sup>しよがく</sup>正覚をとらじ。」

この意味をくだいていいますと、つぎのようになります。

「釈迦私は、偉大なる精神界の覚者になる。そのときには、物はたくさんに作るように、すでに用意されてある。そのときには、衣服は思うだけで、すぐに手にはいるようになる。ただし、そこに条件がある。その衣服というのは、人を幸福にするという関門をくぐりぬけてたところの衣服である。それは聖者、仏のおほめくださる衣服である。そのような衣服ならば、欲しさえすれば自然に手に入るように、たくさんつくる。

その衣服が手にはいらぬで、そのままに裁縫するとか、染めるとか、あるいは洗濯をするような、そんな、やっかいなことなどは決してさせはしない。自動ミシンで作ろうではないか。自動機械で染めあげようではないか。自動洗濯機械で洗濯しようではないか。もしそうでなくて、そんな機械もできなくて、衣服が思うように手にはいらぬならば、私は精神界の覚者と仰がれる仏の位には、のぼれと申されても、のぼりはしない。」

2) 大無量寿経、第38願

こんなように、ぐだいて訳すことができるかと思います。たしかに釈迦は物というものは、人の幸福に対して、大切であるということを考えていました。しかしその物に条件がある。それは仏のほめ給う物であるという条件である。人に幸福を与えるという物である。つまりその根底において、Kの場に同調するという物であることをのべていると考えられます。

釈迦のこのような思想は、その言行の方々で見ることができますが、それはあまりにも、くどくなりますので、ここでは上の一つの例を紹介するにとどめておきましょう。

## 15 聖賢の言葉 2

論語<sup>3)</sup>によって孔子の言葉を味わってみましょう。

「莫春には春服すでに成る。冠者五六人、童子六七人、沂に浴し、ふうに風じ、詠して帰らん。孔子きせんとし、嘆じていわく、われは点にくみせん。」

訳してみましよう。

「孔子が四五人のお弟子さんを集めて、座談会をしました。そしてそれぞれの将来の夢を語らせました。多くの弟子たちは、私は総理になる、私は大臣になるなどと皆いさましいことを云うのです。これはこの文章の前にあることです。

最後に点というお弟子さんの番になります。その答がこの文章です。「わたくしには兄弟子たちのような大きい希望はありません。せいぜいのところが青年が5～6人です。少年が6～7人です。この人たちを身なりよく着かざらせたいたのです。春の終りごろには、もうとくに用意のととのっている、さっぱりとした春服に着がえさせます。この人たちをつれて沂にいたり、そこでともに水浴をしたいのです。ときにはまた、「ふう」という高台にのぼって詩をうたい、うたいおえて楽しく家路に帰ってきたいのです。これが私の望みなのです。」と答えました。

お師匠様の孔子は、点のこの答をききまして、本当に心から同意して、「点や、私もお前と同じ心である。」と申すのであります。

師弟のこの問答を読みまして、私はさっするのです。点がどのように春服という物に心をよせていたかということをおもうのです。そしてまた人生のよろこびはなにも総理になるのでもなく、大臣になるのでもない。冠者や童子と呼ばれるような若い人々とともに、幸福の世界に入っていく。Kの場にはいって行く。このところに真のよろこびがある。このことを若い人々に伝える。伝えられた若い人々の心の中に、自分の心を生かすようにする。自分の心は、これによって永遠の生を永られること

ができる。そして世の中もこれによって幸福になる。これが点の思っている人生の望みであります。ですから外観はまことにさびしいようにも見えます。しかし内観すれば、まことに楽しい。このことについて、さすがは孔子であります。最大限の言葉をもって、点のこの心をほめぬいています。

## 16 聖賢の言葉 3

物についてもう一つ申しましよう。それは蓮如の言葉<sup>4)</sup>であります。

「蓮如上人御廊下を御通り候うて、紙切の落ちて候いつるを御覧せられ『仏法領の物をあだにするかや』と仰せられ、両の御手にて御頂き候う。」

蓮如もまた内観のできる人物でありました。内観してKの場において紙切れをみるのであります。廊下を通ったときに、ふとみるとそこに、紙切れが落ちています。蓮如はこの紙切れを拾いあげます。そして両方の手でこれをおし頂いて、これは仏法領のものである。Kの場のものである。人を幸福にしてくれる世界から生れてきた物である。この中にもKの場のエネルギーが存在している。どうしてあだおろそかにできるものであろうか。そして、うやうやしくこれをおし頂いて、Kの場の恩、仏恩を感謝する。この有様がこの文章にみられます。

われわれの先覚者と呼ばれる人たちは、古今をとわず東西をわかつたず、等しく物というものに対して内観しています。内観するときには、そこに物が人類を幸福にしてくれてきた姿が浮き上がってきます。そしてその物を生産してきた人々の功績、それから、Kの場についてのありがたさ、偉大さということが、感謝をもって受けとられてくるのであります。

## 17 聖賢の言葉 4

教育の聖者と仰がれているスイスのペスタロッチのことについて、最後に、紹介いたしましよう。

ペスタロッチは、いつも思っていたのです。なるほど、自分の住むこのスイスは、アルプスの山のふもとにある。そして北緯50度のところにある。国中どこをさがしてみても地下資源は一物もない。そのうえに冷害は3年に2度はくる。しかし、ペスタロッチは信じていたのです。こどもやはり、神のめぐみの、ゆたかなところであるとかたく信じていたのです。たとい孤児が野にみちていても、浮浪児が山にさまよっていても、ここにも神の恵み

3) 論語先進第十一

4) 蓮如上人御一代聞書、末、308節



はある。かならずある。ただそれが、かくされにところにあると信じぬいていました。そして、ただ一人、シタンツに孤児院をつくり、多くの孤児たちと寝おきをともしながら、その教育につくしてきました。

私はその遺跡を実際にこの目でみてきました。そのペスタロッチが、かいているのです<sup>5)</sup>。

「人間はパンがどうしてできるかを知らないならば、かれのすべての知識は、なんの役にたつのであろうか。」

ペスタロッチはいつも内観するのです。内観してみると物のできる神秘が、しみじみと、見えるのです。パンをその例にとってみます。パンはむろん人の手で作られるものです。ですから、これは技能によってできたものです。しかし人の技能で作ったものとしては、あまりにもすばらしいものです。パンのできかたの過程をみても、これがはたして、人の技能だけでつくられたものとして、いいえられるのでしょうか。そしてまた、そのパンを口にいれる。口にいれますと、人々の命をつなぐ、かてとなることができる、このようなパンというものの力は、あまりにも偉大である、やはりこれは、人の技能だけで作られたものというには、あまりにも気高いものである。このようにペスタロッチは、人の作るパン、または物について内観をするのです、そしてその奥に働いている、神のめぐみというもの、つまりKという場というものに到達していくのです。

ですからこの内観を通して物を作っていくときには、よしんばスイスの外観はどんなにさみしいとて、必ず豊かな国に到達することができ、同じこの北緯50のアルプスの山ろくに、幸福な国ができると、ペスタロッチは信じていました。このようなペスタロッチの心持が、短いき文章から私にはうかがえるのです。

そして150年たったいま、同じこのスイスに、ペスタロッチの夢みた、すばらしいスイスの国が、正しく到来

しています。ですからペスタロッチの言ったことは、けって、たわごとではなかったということが言えます。

すると、いままでにのべてきた、たくさんの言葉も、おなじことでしょう。もしもこれらのことを日本の国で行うときには、スイスと同じようなすばらしい国が、同じこの日本の国土のうえに到来するものと考えられます。

## 18 結 論

工業によって物を生産するということ、および、それを後からくる人に教えて、ともに生産にはげんでいくということが、私たちのこれからの使命であります。このことに対して、もう、外観だけをするをやめましょう。内観というものをしてみましょう。するとそこにKの場という、場の広がりのあることがあきらかになってきます。そして私たちの幸福は、このKの場の中で幸福体という形をつくりながら、過去から中世をへて、次第に長をかさね、現在にまでのびてき、さらに、これから将来にもものびていく勢にあるということがわかるのです。

成長していくこの幸福体に対しては、生産された物というものが大きい役をしています。しかもそれはたんなる物ではありません。幸福に参与するという関門を通過した物です。通過したときの物は物ながら、それは別種の性質となった物であります。

われわれは、なにによって生きがいを感じるのでしょうか。われわれの心がKの場に同調し、われわれの生産する物が関門を通過して、Kの場に自由に出入し、そのような物が人々の幸福に参与する。このときに私たちは、かぎりない生き甲斐いをこの身に感得するのであります。  
(昭和42年10月31日稿)

5) 隠者の夕暮、ペスタロッチ